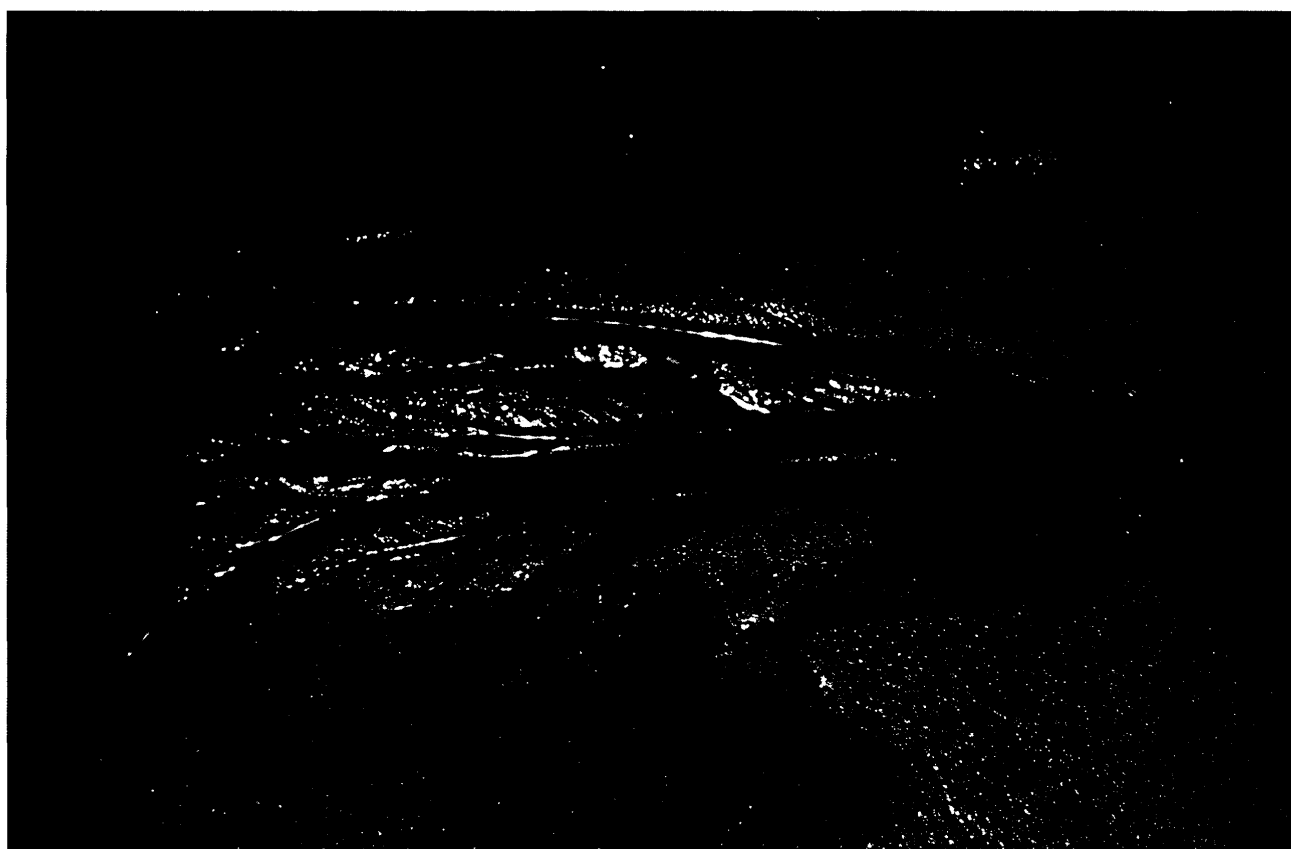


# 渚の造形

The Form of Beach

加藤春生 KATOH HARUO

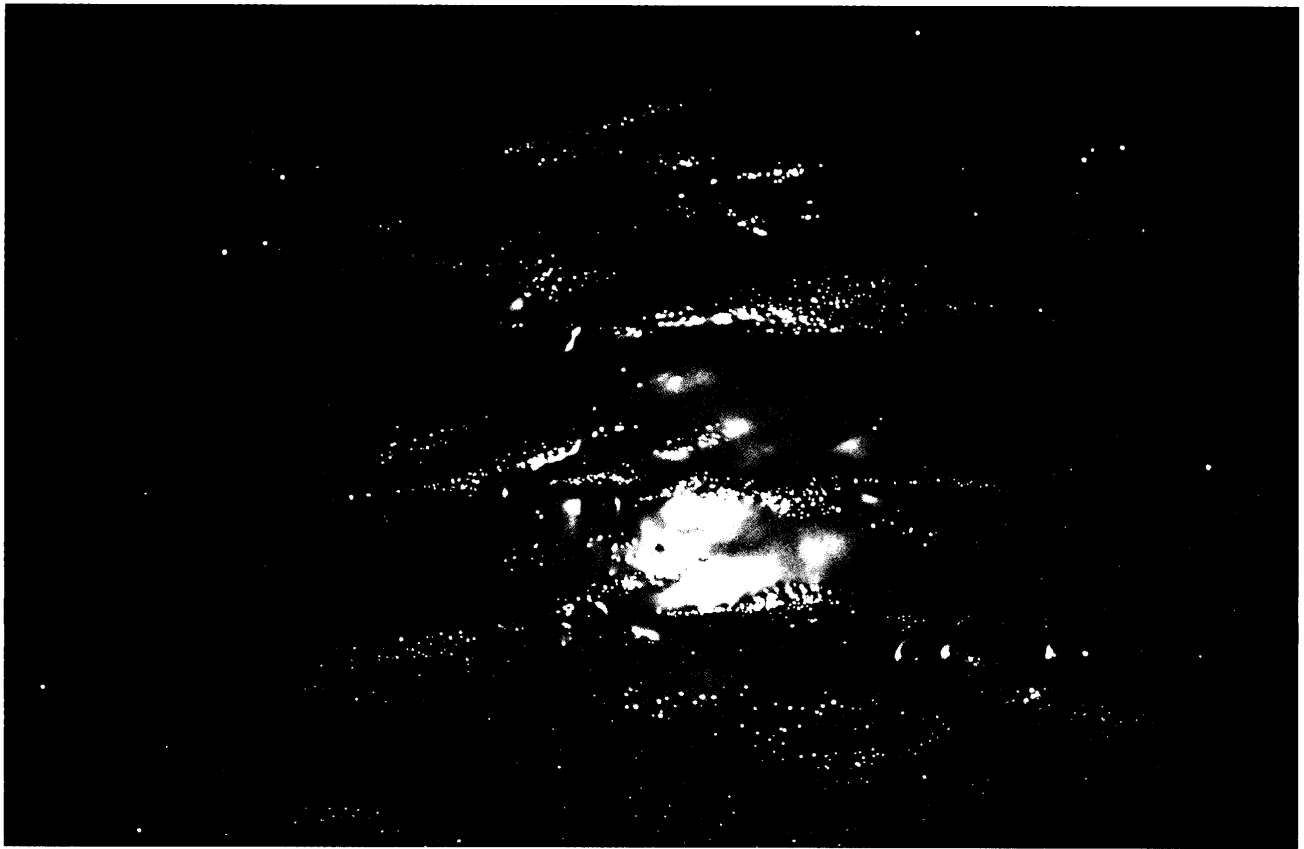
Department of Photography



作品 1



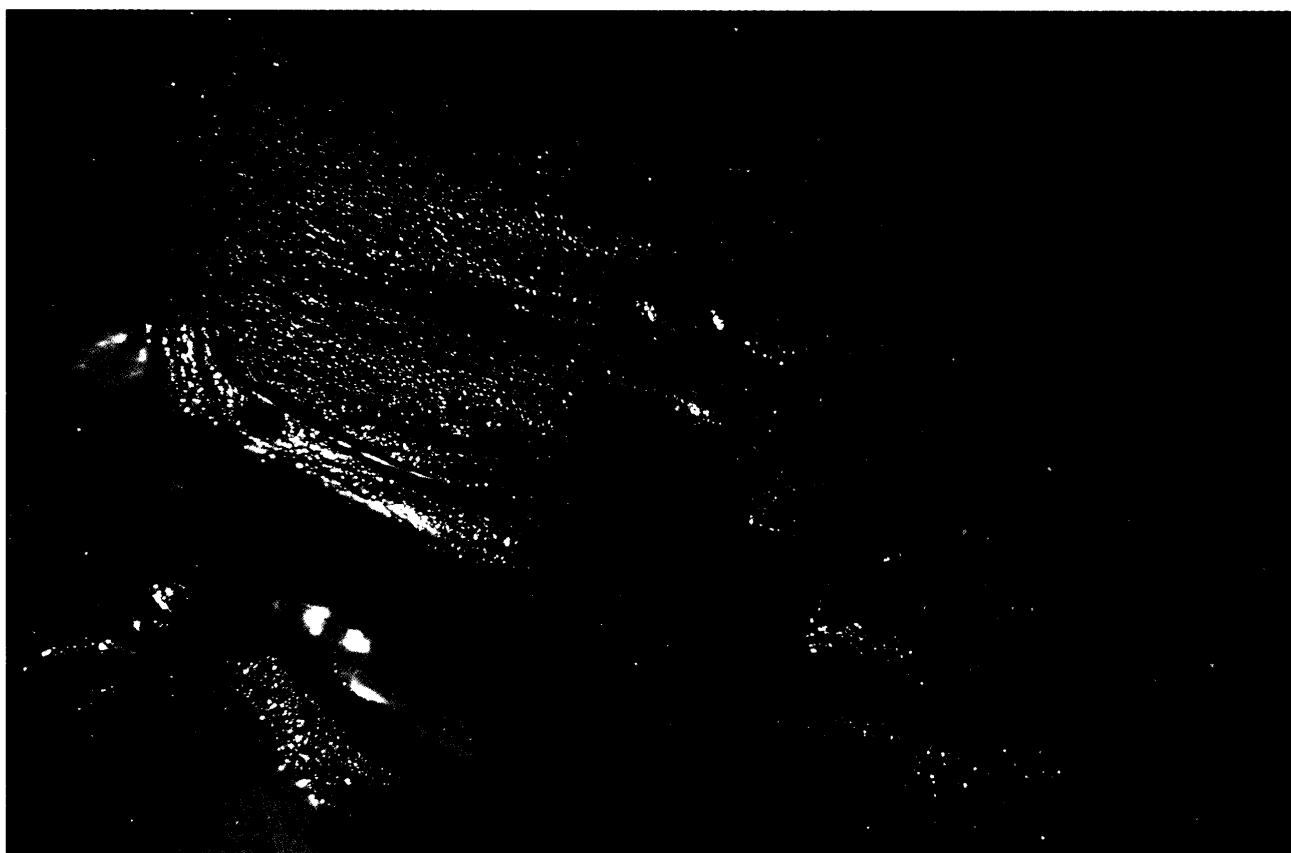
作品 2



作品 3



作品 4



作品 5



作品 6



作品 7

## 『渚の造形』 作品解説

何の変哲もない渚。

ただそこに在るのは、砂と小石と寄せては返す波だけである。

その、何もない波打ち際に見られる、大自然の営為に心引かれ、魅せられたのはいつの頃であつたらうか。

一つの波が寄せ、次の波が寄せるまでの、1分にも満たない時間に描き出される世界は、正に砂浜をキャンパスに波が描く『渚の造形』そのものであった。

このわずかな時間に形作られ消滅して行く『渚の造形』こそは、時間と空間の切り取りにすべての一瞬を昇華する写真家にとって、得難い格好の被写体であった。

その自然の造形に光が演出を加えることによって、そこには突然濃厚な舞台が出現することになる。

この、光の演出の加った『渚の造形』を制作者の内なる造形の世界とて、知覚表象し描き切るための写真材料として、私の制作場面で“ヴィンテージ・フィルム”の登場が必須の要件になった。

これまでの写真界には存在しなかったヴィンテージ・フィルムのは概念は、私が自己の制作の中心に据える「写真という一連の視覚像形成システムそのものが、本質的に内包している画像形成能力を、直接的に表現に結び付けることによって制作を完結し、そこに写真表現の可能性を追い求める」という、思考の内に存在するものである。

ヴィンテージ・フィルムを定義的に解釈すれば、有効期限切れのフィルムということであり、当然、写真特性に変歪が生じることになる。この写真特性の経時変化に伴う偏歪を、写真フィルムのみが有する演出効果として能動的に捉え、作品制作に積極的に導入したものがヴィンテージ・フィルムによる制作過程である。

自己の内なる『渚の造形』を知覚表象した今回の作品については、この写真特性の偏歪の内から、特に“色の偏り”を抽出して制作するために、ヴィンテージ・フィルムとしての機能を得るまでのエイジングに要する時間は、数年から十数年に達している。

さらに、“色の偏り”の演出効果を確認するためには、実際に撮影を行って検証する以外に予測行動はとれず、反復トライアルを必要とすることになる。

このような過程を経て制作した今回の作品によって、鈍い銀白色に輝く砂地は正に新しい『渚の造形』を描くキャンパスであったことを確認し、さらに、人知の及ばないヴィンテージ・フィルムが生み出す自然の妙味を感得することが出来たことは、大いなる収穫であった。